【授業科目】公衆衛生学実習　Practice of Public Health

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
大島 茂、井上 孝	3年次 後　期	必 修	1	30	実 習	あり	巻末 掲載	可

授業概要 (内容と進め方) 及び課題に対する ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法	公衆衛生学実習では、我々の健康に適する生活環境がどのようなものであるかを学ぶ。本実習では飲料水、環境水、大気など身近で康に影響を及ぼす環境要因に関する試験・評価に関する実習を行う。また、公衆衛生や疫学に関する基礎的なデータの取り扱いについて学修する。そのため人口統計情報を用いて主な健康指標の計算や疫学調査について学修する。普段から日常生活で目にする統計資料などに興味を持ち、その統計資料の持つ意味を考える習慣を学修する。＊実務経験を持つ教員が授業を進める。 課題に対するﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法／提出されたレポートにコメントをつけて返却する。適宜実施する課題については模範解答を解説する。
実務経験に関する 授業内容	医学部の基礎医学在籍経験で、臨床検査技師を持つ教員が、公衆衛生の環境検査について、水質検査、空気検査などの教材や経験を交えながら指導する。
授業の 位置づけ	本学のディプロマ・ポリシー①「臨床検査の専門性と責務を自覚するとともに、地域に住むあらゆる健康レベルの人々に専門的知識と技術に基づき臨床検査を実践できる。」の達成に寄与している。
到達目標 (履修者が到達 すべき目標)	①　各種生活環境を公衆衛生学的立場から測定し、これを評価する方法論を修得する。 ②　各種測定法と基準値の意味を説明できる。 ③　公衆衛生に関わる統計の指標についてその意義や算出法を修得し、人口構造等の現状・推移を説明できる。 ④　疫学調査で用いる指標や調査方法について説明できる。
時間外学習に必要な 学修内容および 学習上の助言	事前学習：実習項目の範囲を予習し、実習方法及び使用する器具の操作方法などを理解しておく。(60分) 事後学習：実習後はレポートをまとめて提出することで実習内容を復習する。（60分） ※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（２単位１５回科目の場合：予習+復習４時間／1回）（１単位１５回科目の場合：予習+復習1時間／１回）（１単位８回科目の場合：予習+復習４時間／１回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください
授業計画	第 1・2 回　実習概要と注意点の説明、実習器具の準備 第 3・4 回　水質試験法：飲料水試験（外観、臭気、色度、濁度、pH、浮遊物質） 第 5・6 回　水質試験法：飲料水試験（残留塩素、鉄、硬度、細菌等） 第 7・8 回　環境水試験（外観、温度、臭気、濁度等、亜硝酸性窒素、硝酸性窒等） 第 9・10 回　環境水試験（亜硝酸性窒素、硝酸性窒、BOD・COD等） 第 11・12 回　空気試験法：室内環境測定（温熱環境、空気成分CO2等） 第 13・14 回　空気試験法：室外環境測定（物理的環境、温熱環境等） 第 15 回　保健統計・疫学実習：保健衛生統計指標（人口動態指標、母子保健指標）
	すべて 大島、井上
評価方法 評価基準	成績は以下の評点配分によって総合的に判断する。 実習ごとのレポート30%、　口頭試験70%
教科書	公衆衛生学実習書（配布します）
参考書等	日本薬学会編　『衛生試験法・注解』　金原出版 厚生労働省生活衛生局監修 『上水試験法』　日本水道協会
学生への メッセージ	実習グループでの協調性を重視し、積極的に取り組むこと。 実習に際しては体調を整えて感染防御に努め、実習の前後では手洗いを確実に行うこと。